
話 題

これからの外科学と外科医

京都大学腫瘍外科学 今 村 正 之

これからの外科学がどのように展開していくか、そして外科医がどのように活動していくかを、予想することは難しい。しかし、現在このことが大きな関心を集めているのも事実である。この20数年の間に、従来外科医が扱ってきた良性疾患の多くが内科的治療で治るようになった。例えば消化性潰瘍、食道静脈瘤、大腸ポリープなどである。大方は薬物治療、内視鏡下手術で治るし、消化管出血、外傷に伴う出血処置なども開腹せずに血管内カテーテル法により治る時代になった。もちろん、外科医がこれらの手技に習熟するのは容易であるが、現実として多くは内科医が行っている。手術も鏡視下手術が普及し、大きな皮膚切開を加えることなく、数カ所の小切開創から内視鏡下観察のもとに臓器切除と再建を行う術式がなされる時代になった。これらの非侵襲的治療は患者さんの肉体的、精神的、経済的負担を軽減し、医療の質を高めている。

現在の外科の主要課題は、癌治療と移植である。炎症の外科は重要ではあるが、薬物治療が first choice として行われて後、膿瘍形成などの合併症に対してドレナージュ術や切除が考慮される時代となった。先天性疾患は少ないが、以前として外科の対象である。

癌の治療においては、1)早期発見と2)より非侵襲的手術で治せることが望まれる。現在、早期発見率は癌腫により大きな差があり、胃、大腸癌に比し胆嚢、膵癌の早期発見は将来に残された課題である。画像診断法の革命的進歩が望まれる。私達は、膵内分泌腫瘍に関して、肉眼で見つからない腫瘍の存在と局在診断をする方法を、培養細胞の研究から開発することが出来た。患者さんの身体から腫瘍が全てとり切れたか否かも診断し、根治するシステムも確立した。そのことは、本雑誌の話題としても述べたが、その選択的動脈内刺激剤注入法と術中セクレチン試験である。ガストリノーマのガストリン分泌機序を研究し、患者さんで確認している時にコロンブスの卵のような idea から開発した方法である。米国テキサス大で膵内分泌腫瘍を研究していた Thompson 教授は、私が本法を述べたときに、Hammersmith 病院 (London) の SR Bloom 内科教授と私の前で“それは自分が思いつくべき方法であった”と嘆き、Bloom 教授は“その差は大きいね”と冷やかしたものである。将来、膵癌や胆嚢癌に関しても、どのような基礎的研究から革命的な存在診断法や局在診断法が生まれるか予想できない。基礎的研究の無いところに、新療法の発見や開発はない。持続して研究を続ける以外道はない。

現在、癌細胞の研究が遺伝子レベルで出来ることとなった。ここ15年ほどのことであるが、その急速な展開には目を見張るものがある。癌細胞が血液中に存在するか否か、リンパ節の中に微小転移巣が存在するか否かも診断出来ることとなった。従って、患者さんの身体の中で癌細胞がどのように分布しているか、癌の病態を知ることがより正確に出来る時代に入りつつある。FDG-PET な

MASAYUKI IMAMURA: Surgery and Surgeons in Future

所属: Department of Surgery and Surgical Basic Science

Key words: Surgeons, Diagnosis of Early Cancer

索引語: 外科医・癌早期診断

どの癌の糖代謝亢進に着眼した画像診断法も有力であり、癌の動態把握に役立っている。将来、このような分野での新しい方法の開発が期待される。

癌の研究は種々の観点から研究されているが、臨床に結びつける作業はやはり外科医がしなければならないようである。基礎学者の関心は、法則、原理の探求にあり臨床に応用する段階は臨床家がしなければならない。もちろん臨床に利用されれば基礎学者も大喜びしてくれるのであるが…。従って、これからの外科医の一部には生涯研究する外科医がどうしても必要である。アメリカなどでは、臨床活動をする外科医と研究者が乖離する傾向がある。日本人の研究に対する評価が高まっているのも、彼らの中に研究への意欲が少ないことが原因のように感じられる。米国化すれば日本の外科学の将来も危ういと思う。患者さん一人一人を治療することから、研究が生まれる。患者さんに接する態度の良い医師、臨床的感覚の優れた医師の存在も将来必ず必要であるが、一方で、熱心に研究を続けて、画期的な論文を書くことにより外科学を変革し、前進させる人も必要なのである。

医学教育制度が現在、多方面で議論されているが、将来の医学教育の基本は人間教育から始まり、広い教養と知識の上に、専門家としての臨床家が育成されていくのが望ましい。社会的存在としての外科医は技術を駆使して手術的に患者さんを治療し、その技術の適用の巧みさと熟練度を社会から正しく評価されて、生活していくのがあるべき姿である。外科医は、今まで内科医と同等の知識と研究指向性をもつように努力してきたし、将来もそうであると考えられるから、社会からそれにふさわしい尊敬を受けて良い立場にある。さらに外科医の臨床家としての完成度評価とともに、より創造的研究的外科医としての評価も、社会的に認知させたいものである。そして、外科医の社会的地位が正しく確立されれば、その基盤のうえに優秀で勤勉な外科医十分な仕事ができる時代が来ると思っている。そのように未来のために努力するのが、私達指導者の役目と自覚している。

本雑誌も永年の歴史に幕を閉じることとなったが、これからの外科学と外科医の発展を祈ってやまない。